The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語における「無」の意味についての研究 ：「無」ではじまる二字漢語を中心に
Author(s)	チャン, クォック ヒエップ
Citation	日本語・日本文化研究. 2022, 32, p. 182-196
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90727
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語における「無」の意味についての研究
―「無」ではじまる二字漢語を中心に―

チャン　クォック　ヒエップ

１．はじめに

本稿では、以下の（1）で示されているように、二字漢語の中における「無」が「～がない」を意味していないケースに着目する。

（1）a. 無勢（人数が少ないこと）、無人[1]（人手が足りないこと）、無礼（礼儀を尽くさないこと）、無恥（道徳観念がひどく欠けている様子）など

b. 無価（価を付けられないほど貴重なこと）、無量（限りなく多いこと）、無数（数えきれないほど多いこと）、無念（悔しい、残念なこと）など

（『新明解国語辞典』: 2020）

ここでは、「無」は原義の「絶対ない、存在しない」ではなく、（1a）では「少ない」、（1b）では「多い」などの意味特徴が読み取れる。

つまり、「無」の意味は「ない」から「ある」へ転化し、さらに、「少ない」や「多い」という意味を表すようになり、ひいては程度評価の意を示すに至っている。特に、この「無」の特殊な意味は二字漢語において顕著であり、構成要素が類似している三字漢語と意味の相違を生じさせている。

（2）a.「無価値」＝「無」＋「価値」＝価値がない（良くない意味）

b.「無価」＝「無」＋「価」（価値の略）＝価値が測られないほど貴重だ（良い意味）

（2a）では、「無」が接頭辞として「存在しない」という意味で「価値」の語基を否定するが、（2b）では、「無」が語基の価値を否定するのではなく強調している。このように、「無」ではじまる二字漢語の意味を考察することは、「無」の意味、そして、中でもその特殊な意味特徴を明らかにするために意義がある。

本稿はこのような「無」ではじまる漢語の使用を踏まえ、次の二つの目的で研究を行う。一つ目は、「無」ではじまる二字漢語を対象に、その意味を分析し、「無」が「ない」だけでなく、特殊な意味をもつものを体系的に整理する。二つ目は、認知言語学の枠組みを用いて、「無」の意味が本来の意味である「ない」から、存在の量（多少）および程度の評価（良し悪し）を表すに至るプロセスと動機付けを分析し、「無」の意味の多様性を考察する。

２．先行研究とその問題点

先行研究では、「無」は主に否定的意味をもつ接頭辞として扱われ、派生語を構成する際の意味・用法・機能が提案されてきた。野村（1973）では、接頭辞[2]である「無」を「不」と比較しながら、次の 3 点が注目されている。一つ目に、「無-」は「不-」と同じく、結合形全

体が実体概念または属性概念を表すのに用いられる。それゆえ、「無-」の結合形は名詞のほか、形容動詞的ないし副詞的に使われるものがある。

（3） a. 無意識の状態で床に横たわった。

b. 近くで無意識な人権侵害を防ぐ。

c. 無意識に他人を傷つける。

二つ目に、「不-」がどのような性格の語にも結合できるのに対し、「無-」は（4a）のように、もっぱら実体概念のみを指す語と組み合わさる。また、（4b）のように、属性概念を表す語の中には、「無-」がサ変動詞の語幹（例えば「意識する」の「意識」）に付くものがある。

（4） a. 無国籍、無気力、無事故、無趣味、無表情、無責任、無軌道、無神経など

b. 無意識、無関係、無試験、無制限、無抵抗、無理解など

三つ目に、サ変動詞の語幹に付く際、「不-」の場合は動作性が意識される傾向が強く、「無-」の場合は語幹の実体概念が重視される。（5a）の「不許可」は「許可しない」を意味し、「不」は「許可する」行為を否定する。一方、（5b）の「無許可」は「許可されていない、許可を得ていない」という状態を表しており、「無」は「許可」それ自体の存在を否定し、語幹の名詞性に重点を置いている。

（5） a. 処分場建設は不許可としてほしい、とあらためて要望した。

b. 無許可や許可量を超えた違法伐採は、森林破壊の原因とされる。

接頭辞としての「無」は、漢語を構成する際、主に名詞やサ変動詞の語幹と結合して漢語全体が属性概念を表す。サ変動詞の語幹と結合する際にも、名詞性として認識されることが多い。ただし、野村（1973）は「無」を含めた三字漢語のみを扱っているため、これらの特徴が「無」ではじまる二字漢語にも当てはまるかどうかは検討する必要がある。

相原（1986）は語基の性質に基づいて「不-」、「無-」、「非-」、「未-」の否定的な意味を「概念性の否定」、「存在性の否定」、「行為性の否定」、「事態性の否定」、「価値性の否定」の 5 つに分類した。また、「無-」は合成漢語を作る際、全ての否定的意味をもちうるが、主に「存在性の否定」で機能すると相原（1986）は指摘している。

（6）a. 概念性の否定：無心、無為、無私、無念など（語基の表す概念を離れたか、必要な条件を欠いたこと）

b. 存在性の否定：無試験、無趣味など（語基の表す事象が存在しないこと）

c. 行為性の否定：無差別、無抵抗など（語基の示す行為や動作が行われないこと）

d. 事態性の否定：無難、無所属など（物事がもとの語基や形態素によって示された状態にない、またはそれと相反する状態にあること）

e. 価値性の否定：無勢、無気力など（「悪い」「望ましくない」の意を添える）

相原（1986）は語基の性質に基づいて、「無」の意味の多様性を提示しているが、「無」それ自体に着目しなかった。例をあげると、「無念」は「悔しく思う」を意味しているように、「無」が語基「念」の概念を強めているのであって、「念」の存在性や行為性（「念じる」）

を否定するというわけではない。そのため、「無」は単なる否定の意味に加え、特殊な意味特徴があるかどうかを検討することが必要である。

久保（2016）は否定の意を表す日本語の接辞である「不-」「無-」「非-」「未-」を「明示的な否定を表す接辞」として、それらの否定の多様性を追究した。久保（2016）は、「無-」を接頭辞とした漢語をパラフレーズで置き換えることで、「無」の意味的特徴が主に「語基の表す事物が存在しない」、または「語基の表す動作が行われない」と結論付けている。

（7）a. あの映画を観て泣かないなんて、きみは無感動なんだね。

b. あの映画を観て泣かないなんて、きみは感動がないんだね。

c. あの映画を観て泣かないなんて、きみは感動しないんだね。　（久保　2016 : 36）

また、久保（2016）は Langacker（1987）と有光（2011）の理論に基づいて、「動的特性」と「価値特性」の二つの規準を設定した。「動的特性」は時間的な推移に伴って状態が変化するプロセス、価値特性は語基が表すものに見られる価値的な評価であると定義され、接頭辞「不-」「無-」「非-」「未-」に見られる意味特徴を表 1 のように示している。

表 1 - 日本語における「明示的な否定性を表す接辞」の意味特徴

	「不-」	「無-」	「非-」	「未-」
動的特性	－	－	－	＋
価値特性	＋	－	－	＋
語基の価値	Positive			Positive

（久保　2016 : 53）

表 1 では、（＋）（－）は接頭辞が当該の特性をもつかどうかを示し、Positive は肯定的価値を示す。これを見ると、「無-」は「動的特性」と「価値特性」がないとされる。確かに、「無」は接頭辞として語基と結合する際、静的状態を表すため、「動的特性」をもっていない。だが、「無害」「無事故」「無邪気」などの語基は否定的価値、「無教養」、「無感動」、「無防備」などの語基は肯定的価値をもっているように、「無」の語基が特定の価値をもっていないというわけではないと久保（2016）は述べている。しかし、語基の価値が、「無」の意味、そして語義全体にどのような影響を及ぼしているかについては考察されていない。

以上に述べたように、先行研究では、「無」があくまでも接頭辞として、主に《存在性の否定》《行為性の否定》の意を語基に添えることは明らかにされている。だが、本稿の冒頭で示したように、二字漢語における「無」が一般的な「否定」の解釈から離れた特殊な意味をもっている点については、先行研究で十分に分析されていないと言わざるを得ない。また、「無」ではじまる漢語は、文脈によって辞書的意味や評価的価値が変わる場合があるため、実例を通じて具体的な意味用法を吟味することも不可欠である。

３．考察

研究方法として、本稿は主に辞典記述と実例を分析する。辞典記述は『新明解国語辞典』

（第八版、三省堂、2020）（以下、「新明解」と略す）を対象とし、「ブ」「ム」の音読み、「不」との併記を問わず、「無」で表記される漢語であれば、それを収集する。実例分析は次の 3 つのデータベースを利用する。1.『15 万例文・成句－現代辞典国語用例』（以下、「15 万例」と略す）、2. インタネットの用例収録サイト“用例”（以下、「YOUREI」と略す）、3. 『日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、「BCCWJ」と略す）。

3.1　二字漢語における「無」の典型的な意味と解釈の問題

日本語の二字漢語の中では、「無」ではじまる漢語が圧倒的に多い。一般的に、「無」は語基の表す対象の存在を否定していると考えられる。しかし、語基の表す対象は実体だけでなく、行為や出来事の場合もある。そのため、久保（2016）が指摘しているように、二字漢語における「無」には、(8)のように「対象・事柄が存在しない」を意味するものに加え、(9)のように「行為・出来事が行われない」を意味するものがある。

(8)　無縁：縁がない　　無罪：罪がない
　　無形：形がない　　無学：学識がない
　　無医：医者がいない　　無季：季語がない

(9)　無欠：欠いたことがない　　無頼：頼まれることがない
　　無視：重視されることがない　　無敗：敗れたことがない

「無」ではじまる漢語をパラフレーズで示すことが安易ではないが、(9) と（10）で見られるように、「無」がどのような語基と結合しても、二字漢語全体が属性概念を表すようになり、静的状態をもっているため、それによって、無が「～がない」という意味を生み出す。

「無」が「～がない」と解釈される時、私たちは通常「それが皆無である」と捉える。だが、実際には、単純に皆無だとは言えないことがある。

（10）a. 子どもは<u>無力</u>だ。　　（11）a. 言葉の意味は<u>無数</u>にある。
　　b. 子どもは<u>力がない</u>。　　b. ??言葉の意味は<u>数がない</u>。

（10a）では「無」は文字通り「ない」を意味する。しかし、現実や常識を考慮した場合、「力がない」は「あらゆる力がない」ということではなく、話者が当該の発話において意図する範囲で「ない」ことを述べており、いわば、「十分な力がない」ということであり、別の言い方をすれば、「皆無ではないが、少ない」という状況を表している。類似のことは（10b）の「～がない」という表現にも当てはまる。一方で、（11）では、「無数」は「数がない」とは異なる。そもそも、（11b）は不自然な日本語である。「無数」は「ない」という概念ではなく、逆に数の多さを強調している。そこには、単に「数がない」というのではなく、その原義から「数を数えることができないほど多い」という意味的な派生がある。つまり、無ではじまる漢語は、「～がない」が表さない意味を担うことがある。このように、「無」ではじまる二字漢語には、「～がない」とは異なる解釈や意味定義を有するものが少なくない。次節において、「無」が「皆無」ではなく、「何かある」の意を表すことを詳しく考察する。

3.2　二字漢語における「無」の特殊な意味特徴

辞典の記述を詳しく分析したところ、「無」を第一要素とする二字漢語は「（全く）ない」という意味だけでなく、その逆の「ある」という意味を表す語が少なからずあることが分かった。また、単に「ある」という意味ではなく、「少ないが、ある」または「たくさんある」という意味を表す。本稿では、これらの意味特徴をそれぞれ《少ない》と《多い》と名付け、分析していく。分析に際しては、実例を挙げながら、この特殊な意味特徴を「無」の二字漢語がもちうることを明らかにする。

3.2.1　意味特徴《少ない》

3.1 節でも触れたが、「無」は《少ない》という意味特徴をもつことがある。「無勢」、「無人」、「無礼」、「無学」、「無知」、「無恥」などでそれが読み取れる。辞典では、「無勢」は「人数がすくないこと。」（新明解：1368）、「無人」は「人数が少ない（人手が足りない）様子だ。」（新明解：1379）と明記されている。当該の意味は（12）や（13）の実例でも確認できる。

（12）鉄炮にて待請けうたせられ候へば、過半打倒され無人になって引退く。

（『日本国語大辞典』pp.987）

（13）多勢に無勢、衛所の駐在兵はあっという間に蹴散らされた。　(BCCWJ)

次に、「無礼」は「礼儀を尽くさないこと（様子）。」（新明解：1392）、「無学」は「十分（専門的）な教育を受けていないこと（様子）。」（新明解：1516）と記載されている。そして、「無知」は「知的な能力に欠けていて、普通の人と同じような知識や判断力をもち合わせていないこと（様子）。」（新明解：1524）、「無恥」は「〔神経が鈍くて〕それを恥だとする道徳観念がひどく欠けている様子だ。」（新明解：1524）、ということをそれぞれ意味している。これらの語の定義には「尽くさない」、「十分ではない」、「欠けている」という説明があり、マイナスのイメージが読み取れる。

（14）a. それはもう「失礼」どころの話ではなく、「甚だしく無礼」ということになる。
b. この作品の精神は、耕奴法の害悪、無学の悪徳、家庭の圧制である。
c. お互い全くの無芸無趣味であるからして、共通の話題など皆無に等しい。
d. 反グローバリズムは人々の無知に乗じた宣伝であり、逆に市民社会の成長を妨げているとする。
e. このままでは、あなたは、日本の政治史上、無能、無策、厚顔無恥、最悪の総理として悪名を残すことになりましょう。　(BCCWJ)

（14）の実例においては、語基が表す概念はそれぞれ礼儀、学識、芸能、知識、廉恥に関連しており、「無」と共起することで、それらの道徳・品質が「極めて少ない、甚だしく良くない」と否定的に評価される。これは「無」が「数量が少ない」から「尽くさない、十分ではない、欠けている」へと派生し、さらには「それに対する悪評」という意味合いが加わる

に至ったことを示唆している。つまり、《少ない》意味特徴と同時に《良くない》意味合いが「無」にあると言えるだろう。だが、(15) の例では、(14) と同じ漢語を用いられるが、文の意味は完全にマイナス的な意味をもっているというわけではない。

(15) a. いかにも無礼なことをしましたが、どうかおゆるしくださいますよう。

b. 父親は無学な娘の手紙を読んで、その上に熱い涙を落としましたとのこと。

c. もっとも、敏感よりは鈍感、多芸よりは無芸、器用よりは不器用な方が、特務員としては成果を上げるというのが、特務員研修所の見解である。

d. 私は車についてまったくの無知だったが、清潔で高級そうな椅子だった。

e. こうした無恥な言葉の中にも、一面の真理があったからである。 (YOUREI)

(14) の全ての例文は、「無」ではじまる漢語がマイナス的イメージの言葉と共起したため、否定的な意味をもっている。一方、(15) では、「無」が《少ない》という意味特徴をもっているものの、対比となるプラス的表現があるため、文全体の意味が悪くならない。つまり、同じ漢語を使われていても、共起する言葉・表現によって、文の意味合い、そして、読み取れるニュアンスが変わる。この点について、久保 (2016 : 30) は「語の価値特性は (中略) 「語彙内在型価値」と「文脈依存型価値」とに分けられる。語彙内在型価値とは、語に本来的に内在している価値を指し、文脈依存型価値とは、ある語が文脈のなかに組み込まれることによってはじめて立ちあらわれる価値を指す。」と述べている。このように、「無」の《少ない》は漢語それ自体だけでなく、文脈の中において確認できる場合もある。以下の (16) に使われる漢語は辞典の記述において特別な意味は明確になっていないが、具体的な文脈に置かれることで、《少ない》の意味を発生しているケースである。

(16) a. 有効な作戦が浮かばず、僕は無策で試合に臨まなければならなかった。(15 万例)

〔説明：有効な作戦がなくても、そのまま試合に臨むのも一つの対策だ〕

b. 女の眼が恐ろしい無言のことばと、底に哀訴の色をひらめかしていた。(YOUREI)

〔説明：口で言葉を発言しないが、心の本音を他人に読ませる〕

c. 一台の車が信号を無視して、交差点に突っ込んできた。 (15 万例)

〔説明：注意を十分に入れないで運転した〕

d. 会社では有能な人間も、地域や家庭においてはまったく無能だ (...)。 (15 万例)

〔説明：特定の場面で才能がないけれど、完全に無能な人ではない〕

e. 今回の遭難の原因は、無謀な登山計画にある。 (15 万例)

〔説明：計画があったが、有効ではなかった〕

(16) の「無」ではじまる二字漢語の意味は、文脈を考慮すると、「全くない」ではなく、〔 〕で説明した通り、「元々何かある、または、何かあったが、量が少ない、または、足りない、そして、質が良くない」の意を表している。このようなケースでは、「無」ではじまる二字漢語の辞書的意味よりも、共起する表現 (波線部) や文脈に基づいて実際の使われ方を判断しなければならない。そのため、《少ない》は、純粋に意味論 (辞書) 的意味に限定

されるのでなく、語用論的に生じる場合も含まれる。

3.2.2　意味特徴《多い》

《少ない》だけでなく、「無」は意味特徴《多い》をもっている。それは「無価」、「無数」、「無量」、「無念」、「無残」、「無駄」、「無茶」などで確認される。これらの漢語の意味は「～がない」ではなく、「（非常に）多い」と解釈される。「通俗的な評価をはるかに超えているほど貴重だ。」（新明解：1516）として定義されるように、（17）の「無価」は完全に「価値がない」ではなく、「非常に価値がある」という《良い》意味がある。「無価」の意味は物質的価値よりも、精神的価値のほうが重視される。ただし、「無価」は確認できる実例が少ない[3]。

（17）a. 何物にも替えがたい無価の家宝。　（コトバンク『デジタル大辞泉』）

b. 諸々の宝の香炉には、無価の香を焚きて、もろもろの世尊に供養じ奉る。
（作者不詳『栄花物語』「鳥の舞」巻）

c. 深い心の底には（中略）無価の宝石も潜ひそんで居ることを忘れてはならぬ。
（徳冨蘆花『みみずのたはこと』）

「無数」がもつ「数えられないほど多い様子だ。」（新明解：1522）という意味は、以下の（18）の実例で確認される。また、それらの対象は大きく 2 つに分けられる。一つは（18）の a,b,c で見られるように、実在している対象（皮の穴、蛾、星）、である。これらの対象は目に見えるため、数えることができるはずものだが、その数が実際には数えられないほど多い様子を表している。もう一つは（18）の d,e で見られるように、無形の対象または抽象的な対象（関係、教訓、反省）を指し、人間が本当の数を把握しようとしてもできないものである。

（18）a. 人の皮膚には、穴が無数にあり、そこから汗がにじみ出るのです。　(15 万例)

b. 花は、たちまちのうちに、無数の黄色な蛾が飛んできたのを見た。　(YOUREI)

c. テントから見上げる夜空には、銀の砂をまき散らしたように、無数の星がまたたいている。　(15 万例)

d. 教訓も反省も、僕の過去のなかにすら、おそらく無数に存在している。(BCCWJ)

e. 人間は世界の中にいて、そこにある他の無数の多くのものと関係に立っている。
(15 万例)

「無数」と同じく、「無量」は「量がない」ではなく、「量が多い」と言い換えられる。（19）で見られるように「無量」はほとんどが抽象的な対象を修飾している。

（19）a. これから先の人生で、きみが無量の悲しみに沈むこともあるだろう。　(15 万例)

b. 彼女は何も言わなかったが、その微笑には無量の意味がこめられていた。
(YOUREI)

c. このことばは、いつまでも彼の耳朶に響き渡り、それにつれて無量の感動が、うねりのごとくに湧いた。　(BCCWJ)

「どれだけある（深い）か、簡単には言い尽くせないこと。」（新明解 : 1528）を意味する「無量」は人間の感情を表し、その「多さ、深さ」という意味を添える。これは、人間の感情の多さを表す「感無量」、「感慨無量」、「千万無量」などの熟語から分かる。このように、「無価」、「無数」、「無量」の辞書における意味記述とコーパスを通じて、「無」の意味特徴《多い》は語基が表す対象の存在の多さを強調し、「ない」という字義が消えていることが分かった。「無」は「～がない」ではなく、それとは全く逆と言ってもいいような「～が甚だしく多い」を意味することがある。ただし、そのような意味を表す漢語は、実例を観察すると、具体的なものよりも、抽象的なものによく言及する点が特徴だと考えられる。

《多い》という意味特徴は「無念」、「無残」、「無駄」、「無茶」にも確認される。これらの語彙は「無価」、「無数」、「無量」と比べて、多義性やマイナス的なイメージを伴うため、《多い》という意味特徴に気づきにくい。また、このような語では、意味が変化したため、《多い》という意味特徴は「無」自体のものではなく、語義全体で発生し、「ない」から類推した結果だと考えられる。まずは、仏教語に由来し、意味変化によって多義になった「無念」と「無残」を分析してみる。「無念」は「精神を統一して、余計な事を何も考えない様子だ。」から、「（大きな力に対してあまりにも無力であって）今となってはどうすることもできないことを思い知って悔しく思う様子。」を意味している（新明解 : 1526）。このように、「無念」の意味は「とても残念だ」を意味しているため、「無」の《多い》という意味特徴が読み取れる。つまり、「念が多く残っている」ということである。以下の（20）を見られたい。

（20）今年こそはと期待したのに、また入試に失敗し、無念の涙をのんだ。　(15 万例)

（21）事故現場の無残な光景に、男はぼうぜんと立ちつくした。　(15 万例)

同じく、「無残（無惨・無慚・無慙とも）」は本来「（無慙・無慚）僧が罪を犯しながら心に恥じるところのないこと」、「心残りがない」を意味しており、「無」が典型的な「ない」という意味を維持していた。しかし、現代日本語では、「（無惨・無残）むごたらしくて（かわいそうで）見ていられない様子だ。」（新明解 : 1520）を表すようになり、意味が変化した。（21）では、「残」が「残酷」を意味し、「無残」が「残酷でたまらない」と理解される。このように、「無念」、「無残」における「無」は本来「ない」という意味しかもっていなかったが、現代語では甚だしい程度を示し、《多い》という意味特徴をもっていると言える。

最後に、和製漢語である「無駄」「無茶」にもこの意味特徴《多い》を確認できる。「無駄」は「1. せっかく何かをしても、それだけのかいがないこと（様子）。2. 役にも立たない使い方をすること（様子）。」（新明解 : 1524）、「無茶」は「1. 言動が常識や論理を逸脱していてまともだとは考えられない（人に迷惑をかける）こと（様子）。2. 異常と感じられるほど程度がはなはだしい様子だ。」（新明解 : 1524）のようにそれぞれ定義されている。

（22）　我々が一人の人間の性格を描かうと努力しても無駄である。　(YOUREI)

（23）　無茶とひたむきは背中合わせ、まさに青春の特権だ。　(15 万例)

『日本国語大辞典』（2002）の記載によれば、「無駄」と「無茶」は擬音語に由来し、現在の

表記は当て字か借字だと説明されているが、意味の側面からみれば、「無」と関係しないというわけではない。「無駄」の漢語構成を分析してみると、「駄」は本来「荷負い馬」を指すが、「駄文」、「駄賃」、「駄作」、「駄本」などで「価値の低いもの」を指すようになっている。「ない」を意味する「無」が「駄」と結合すると、「無駄」が「価値の低いものはない」または「価値の低いものではない」という良い意味をもつことになるだろう。しかし、「無駄」の意味は完全に悪い、マイナス的イメージがあるため、この推定とは合わない。一方で、《多い》を意味する「無」で解釈すると、「価値の低いものが多く、無意味になる」となり、「無駄」の意味と合致する。つまり、「無駄」における「無」は《多い》の意味をもっていると言えるだろう。同様に、「無茶」も同じルートで意味が発生していると考えられる。「無茶」の「茶」は「茶目・茶番」で見られるように、「ひやかし、おどけ、ふざけ」の意をもっている。そのため、「無茶」は「茶化すことが多い」から「不真面目、乱暴なさま」を指すようになっていると想像できる[4]。また、「無駄」と「無茶」はどちらも「悪くて、程度が甚だしい」の意を表すため、「無」は《多い》という意味特徴から発生した《甚だしい》の意によって語基の程度を強調していると考えられる。つまり、「無駄」と「無茶」における「無」は《多い》という意味、そして、《甚だしい》という程度評価を伴ってマイナス的な語基と結合するため、語全体が「良くない」意味をもてるようになる。このように、「無」が字義通りではなく、《多い》という意味特徴、《甚だしい》という程度を表しているため、「ムダ」と「ムチャ」は「無」ではじまる表記が採用されていると説明できるようになる。

ここまで、「無」ではじまる二字漢語を考察した結果、「無」は語基が表す対象の完全な否定（ないし不在）のみならず、その対象が存在することを表す場合があることが明らかになった。辞典記述と実例の分析から、「無」は、「（存在し）ない」というその原義からすると特殊だと思われる《多い》と《少ない》という意味特徴を備えることがあり、さらに《良い》や《良くない》のような程度評価に発展することが確認できた。

４．「無」の特殊な意味特徴の形成と周辺

有光（2011 : 29-30）は、存在の有無を表す根源的な対比「ある・ない」は存在の量の多さを表す「多い・少ない」から、量を大きさで見立てた場合「大きい・小さい」、量を力の強さだと「強い・弱い」などに、さらにそれが質感、価値判断など高度に抽象的な方向の対比概念（生・死、善・悪、美・醜）へ展開していると述べている。「多い・少ない」「良い・良くない」という対比は、存在するものに付加される概念であるため、「ある」の方に属しているが、「絶対ない」ではなく「ある」をも示す「無」の形式にも付加しうる。本稿で指摘しているように、実際、「無」が《多い》と《少ない》の意味特徴をもち、語義に否定的または肯定的な評価を添える二字漢字語が存在している。しかし、どのように「無」から《多い》《少ない》に発生し、そして、この量的価値から《良い》《良くない》の質的評価へ転化するだろうか。以下では、認知言語学の枠組みを援用しながらその解明を試みる。

4.1　「無」の特殊的な意味特徴の形成―量的スケール・質的スケールの導入―

私たち人間は身の回りの世界から自分の能力を超える抽象的対象まで、その数量を把握しようとする。その際、ある尺度や基準を設定し、その数量を「多い・少ない」と判断し、それに沿って「良い・良くない」の程度評価を表す。これは人間の認知の一つであり、それが言葉として表出していると言える。前章までにおいて、「無」ではじまる漢語の意味を分析した結果、具体的に見ることができる対象のみならず、道徳・学識・品行といった抽象的な対象までも、日本人がそれらを「多い・少ない」に量化し、そこから「良い・良くない」という程度を評価することを考察した。言い換えると、「無」ではじまる二字漢語は、日本人が世界を主観的に把握したことを提示し、認知的な測定を反映させたものである。本稿はこの測定を実現させる尺度を「量的スケール」と「質的スケール」と称する。量的スケールは、対象の存在を量の多さで測る。そして、質的スケールは、量的スケールで行われた物事・事柄の量の把握からその価値を良し悪しの程度で評価する尺度である。

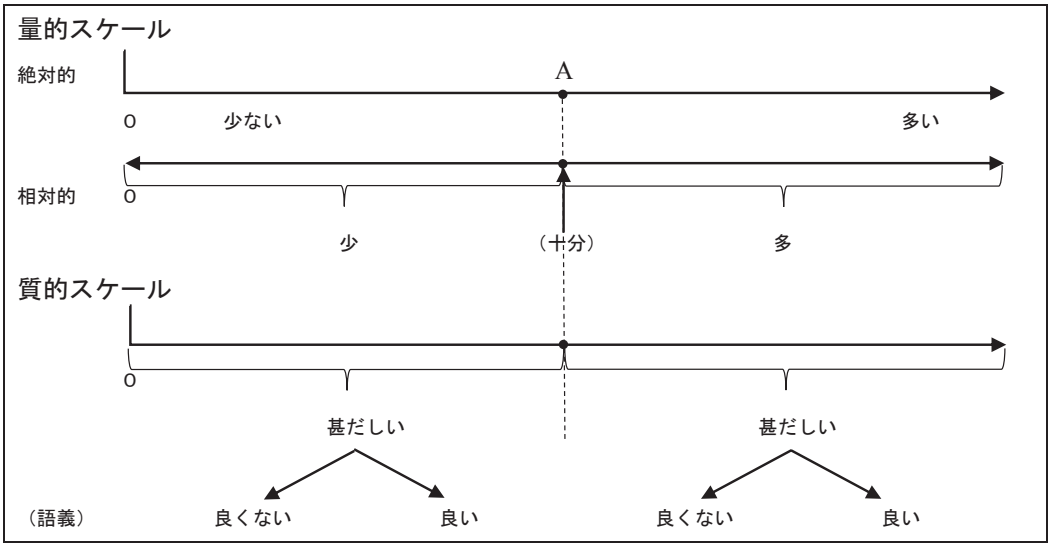
本稿は Croft＆Cruse（2004）が論じたスケールシステムを想定している。語義において「多い」と「少ない」、そして、「良い」と「良くない」は、それぞれ反意関係にある概念である。だが、「生・死」「正・誤」「男・女」（Complementaries）と異なり、「多い・少ない」「良い・良くない」は、それぞれの間に無数の中間的な段階が存在している。Croft＆Cruse（2004）がこのような Antonymy をスケールで表示できると提案し、Monoscalar、Biscalar、Disjunct、Parrallele、Overlaping の概念を導入した。その中で、Monoscalar は「長い・短い」（いずれも Length 概念に属する）などの対比を一つのスケールで表示できるシステムである。Overlaping は二つのスケールが並行するが、その一部が重複するシステムであり、Merit＆Badness「良い・悪い」の対比を表す。だが、Overlaping の 2 つのスケールは重複しない部分があり、Merit の範囲は Badness の範囲を超えている。そのため、Merit を表すスケールは主要なものであり、Badness を表すスケールは副次的なものとして位置づけられる（Croft＆Cruse　2004：169-171）。したがって、「多い・少ない」という存在の量の多さを示す量的スケールは Monoscalar が、「良い・良くない」という程度評価を示す質的スケールは Overlapping のシステムが当てはまる。

しかし、Monoscalar だけでは Length や Weight などの概念を表しきれないと Croft＆Cruse（2004）は指摘している。Monoscalar で示される 25 cm や 1.7kg は数値であるため、絶対的価値として認識されるが、それを「長い・短い」や「重い・軽い」を用いて容易に評価できるわけではない。長さが 25cm を超えなくても a long pencil、重さが 1.7kg しかなくても a heavy suitcase となりうる。そのため、長短、重軽、多少を判断する際、絶対的なスケールだけでなく、相対的スケールを加えて Full monoscalar system を設定する必要がある。相対的スケールは、絶対的スケールの一つの価値（または一つの範囲）を基準に、対象を評価するものである（Croft＆Cruse　2004 : 173）。また、「良い・良くない」の程度評価を表す Overlapping

のシステムに関して、Raykowski（2022：35）は感覚スキーマによって Badness が既に Merit のスケールに含まれていると主張している。その際、Merit の平均価値が Badness の最小値として採用され、Badness の最大値は、Merit スケールの「0」となると述べている。言い換えると、良さのスケールにおいて A という点を悪さの原点とすれば、「悪い」の範囲は良さのスケール の 0 から A までに限定されるようになる。つまり、Overlapping のシステムは一つのスケールで良し悪しを示すことができる。

本稿は先行研究の指摘を踏まえて、3.2 節で分析した「無」の意味特徴の体系、そして、量から質への意味特徴の転化プロセスを図 1 として提案する。

図 1 - 「無」における量的スケールと質的スケール



量的スケールの絶対的スケールは単純に量の多さを数値で表示さする。原点「0」に近い方向は《少ない》、反対方向は《多い》の価値を示す。しかし、前述したように、どのぐらいであれば、少ないとか、多いとかを数値のみで示すことはできない。そのため、量的スケールで多いか少ないかを判断するには、そのための基準がある相対的スケールを設けなければならない。量的スケールにおける相対的スケールは、過不足に関するものである。図 1 で示しているように、相対的スケールでも「0」が原点で、絶対的スケールの A を参考価値として設定する。この A は相対スケールの基準として、「無」ではじまる漢語の価値を判断できるようになる。具体的には、「無」の二字漢語が表す価値が A に達しなければ、当該漢語における《少ない》は絶対的スケールの左側に位置し、相対スケールの「少」の範囲に当たる。足りない部分が多ければ多いほど、当該漢語の価値は原点「0」に近づき、「0」は「全くない」として扱われる。反対に、価値が A を大幅に超えれば、当該漢語における《多い》は絶対的スケールの右側に位置し、相対的スケールの「多」の部分に当たる。この部分が多ければ多いほど、《多い》の価値は終着点がなく、相対的スケールでは無限大になる。

4.2　「無」の特殊的な意味特徴―量から質への転化―

「無」ではじまる漢語の《多い》と《少ない》の意味特徴を量の多さを示すスケール（量的スケール）で把握できれば、「無」の価値が質的スケールの評価に転化するプロセスを確認できる。有光（2011）が日本語の否定の用法においては、「FROM QUANTITY TO QUALITY」、つまり、「量から質へ」という認知的動機づけが機能していると指摘している。このように、「無」の価値が量的スケールから質的スケールに転化することは、日本人の「無」に対する認知を示している。なぜかというと、大きな量・程度や小さな量・程度を表す言葉を通じて、対象への価値的な評価や態度が表れるからである。本稿の考察を踏まえて、《良い》または《良くない》は「無」それ自体の意味特徴ではなく、後ろの語基と組み合わせた語義で発生した意味合いである。そのため、量的スケールにおける「無」は、《少ない》であれ、《多い》であれ、質的スケールに転化すると、《甚だしい》という質的価値になると考えられる。

無ではじまる二字漢語はマイナス的なイメージを伴う語が多いため、意味特徴《少ない》をもつ「無」の価値は《少ない》から《良くない》に転化していると推測される。これは「多勢に無勢」の例のように、人間が「MORE IS GOOD、LESS IS BAD」を認知しているからである（有光 2011：240）。他方、ストレス、失敗、損害などは、「少ない方が良い」ため、その認知が逆になる。このように、《少ない》は質的スケールに転化する際、まずは《甚だしい》と解釈され、《良い》か《良くない》かは語基の価値をもとに語義全体で生じた結果である。「無礼」、「無恥」、「無学」など、語基がプラス的な意味の場合は、《少ない》状況が《良くない》になるが、「無策」、「無謀」、「無言」のように、語基がその価値において中立的であっても、語義が《良くない》となる。《少ない》の意味特徴をもつと見られる「無欲」、「無私」などでは語基がマイナス的であるため、語義全体が《良い》意味になる。

（24）a. 彼は、日々くらしていくのに必要なもの以上に関しては無欲の人だった。

b. 無私の精神がなければ、とてもボランティア活動には従事できない。(15 万例)

同じく、《多い》は質的スケールで程度が《甚だしい》と評価されるが、結合する語基によって、「無」ではじまる漢語の価値が《良い》、《良くない》に分けられる。例えば、「無価」はプラス的な語基であるため、《甚だしい》から語義が《良い》へと転化する。「無茶」、「無駄」、「無残」の語基はマイナス的で、その価値は《甚だしい》から《良くない》へ転化する。

ただし、語基が同じく中立的であっても、意味特徴《少ない》をもっている「無策」、「無謀」、「無言」などは語義で《良くない》になるが、意味特徴《多い》をもっている「無数」、「無量」は語義が《良い》か、《良くない》かを断言できない。この差異については、今後、さらに検討する必要はあるが、「無策」などの語基は中立的であっても、人間にとって、あったほうが望ましいと認知しているのであろう。一方で、単純に数、量の多さを表し、その程度が《甚だしい》と評価される「無数」、「無量」は、文脈を考慮しないと、価値判断が《良い》か《良くない》か判断しにくい。

（25）a. その茶器と同じ所産心でできた無数の美しい器が存在する。　(YOUREI)

b. あの頬と唇と顎とに光るとろりとした光のうちにも、無量の慧智と意力とが感じられる。 (YOUREI)

（26）a. 未成文の規則は無数の問題を生むこととなる。 (BCCWJ)

b. 無量の淋しさが「先生」を襲い、やがて自分で自分を殺すべきだという考えが生ずる。 (BCCWJ)

(25) では「無数」と「無量」は良い意味をもつ表現（波線部）と共起しているため、「量が多くて良い」を意味する。一方、(26) では良くない意味の表現（波線部）を修飾し、「多すぎて良くない」という意図で使われている。これは「多芸は無芸」、「礼も過ぎれば無礼になる」と同じく、(例え、それが良いものであっても)《多い》は必ずしも「良い」というわけではなく、むしろ「良くない、悪い」と認知されることがあることを示している。

以上の考察をまとめると、「無」の価値は量から質へ転化できるが、量的スケールでは《少ない》と《多い》に二分化されるのに対し、質的スケールは《甚だしい》という意味特徴のみをもっている。この意味特徴《甚だしい》は「無」と結合する語基の意味内容によって、語義全体で《良い》か《良くない》に発展するが、特に語基が中立的な価値をもつ場合、《良い》《良くない》の評価は文脈依存することがある。

4.3 「無」―意味の豊かさ―

以上、辞書の定義や実例を分析しながら、「無」ではじまる漢語のなかに、典型的な意味である「ない」しか持たない語だけでなく、良い状態にあることを意味する語が存在することを指摘するとともに、認知言語学のスケールシステムを導入することでその意味的派生について説明できることを明らかにした。まず、典型的な意味の「ない」をもつ「無給」、「無縁」、「無味」などでは、(27) のように「無」が「語基の表すものはあったほうが望ましいが、実はない」の意を表す。

（27）a. 私の場合でいえば、四年間無給で、五年目に月給九千何百円をもらった。

b. 大恋愛や大失恋、そしてそれらの繰り返しなどとも、彼女は無縁だった。

c. 普段ドラえもんが出す当道具は無味だが、味付きバージョンも存在する。

(YOUREI)

次に、「無難」、「無事」、「無害」のそれぞれが「困難がない」「事故がない」「害がない」を意味し、「無」は「ない」を意味しているものの、語全体が良い意味をもっている。実際、辞典の記述と実例（28）から見ると、「無」は「何もない」よりも「語基の表す対象はあった、または、あり得たが、今はない」の意を表す。

（28）a.ぶなは葉刈りすると二番芽が不揃いで確実性に欠けるから行わないほうが無難だ。

b.勇気のある十三歳の少年がそのトンネルの中に入り、無事くぐり抜けて出てきた。

c.無機水銀は無害ですが、有機水銀に変化すると有毒なので取り扱いに注意しましょう。 (BCCWJ)

これらの二字漢語の使われ方から、「無」の意味は原義で「全くない」を意味しているが、それは「ある」状態から変化した結果か、今後「ある」に変化していく可能性があるという意味合いが読み取れる。つまり、「無」は変化を潜在的に表し、「ある」と暗に直結している。

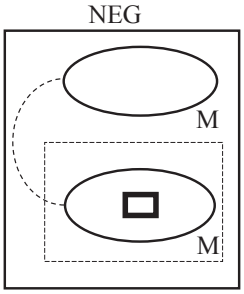


図２ - 否定の認知図式

（Langacker 1991：134）

Langacker（1991）は否定について論じた際、図２のように、否定の空間を二つのメンタルスペースによって示し、否定は対象（□）が、ある空間（M）から外に出されたものであると説いている。つまり、否定の基本概念は存在と非存在の対比によって構成され、その両方の対比の認識こそが否定の表現である。これは「ある空間」が存在しなければ、否定が表現できないことを示唆している。所与の対象は特定の空間に限って見ればその存在が欠如しているが、全景で見ればそれを再確認できる。このように、「無」が「絶対ない」ではなく、「ある」の意を表せることは、「無には有がある」の哲学観念に限らず、Langacker（1991）の否定理論とも一致する。

最後に、量から質へと「無」の価値が転化する際、「無」は否定性のある「ない」から《多い》《甚だしい》《良い》という意味特徴をもてるようになるのは不思議に思われるが、不可解というわけではないことについて触れておきたい。有光（2011）によると、英語や日本語などの諸言語では、恐れや酷さなどを表す否定的価値をもつ表現は、否定的価値を表すだけでなく、口語では純粋に程度が大きいことを表す強調語のようになっている。

（29）a. John’s exam was *awful*.（試験は*ひどかった*）

b. She is *awfully* kind to me.（大変親切だ）

c. 彼の歌は*ひどい*。（下手だ）

d. 彼は*ひどく*笑っていた。（大変笑っていた）　（有光 2011：130）

否定の基盤の一部は基準からの逸脱であり、否定性が強い言葉（awful、ひどい）で大きな程度を表すようになるのは、基準からの極めて大きな逸脱だからであると有光（2011）は説明している。「無」は否定を基盤にしており、原義の「絶対ない」で存在の否定や欠如の結果を表しているため、高度な否定的価値をもっている。そのため、「無」は特別かつ目立った状態を強調する漢語の構成要素として、《多い》や《甚だしい》の意味特徴、そして《良い》というプラス的な評価を表せるのであろう。そして、「無」で膨大な数量や甚だしい程度を表すのは、長い間にその意味合いが固定され、最終的に言葉の語義になったと思われる。

以上、考察してきたように、「無」は原義が否定性をもっているにもかかわらず、それを第一要素にもつ二字漢語は肯定性を表すことがある。また、「無」は「無には有がある」という認知を反映しているため、「（全く）ない」という意味的な縛りがなくなり、「有」の多寡や良し悪しを表せる点で生産性や拡張性に富んでいると言えよう。

５．まとめ

本稿では、「無」ではじまる二字漢語を対象に語義を追究した結果、「無」には《多い》や《少ない》といった意味特徴があり、そこから、《甚だしい》、さらには、《良い》《良くない》といった程度評価が成立することを明らかにした。量的スケールと質的スケールを設定することで、「無」の意味特徴、「無」の価値を体系的にとらえ、量から質へと転化するプロセスを説明することができた。また、「多少」「良し悪し」の対比、語義・文脈の対比を行い、「無」の意味が豊かで、人間の認知を反映していることを示した。その認知の基盤は「有・無」の対比に由来し、「存在・非存在」と「肯定・否定」の範疇にも関係する。そして、「無は有を包含し、有を生じる」という哲学も反映していることを示唆した。このように、「無」ではじまる漢語の意味を探求すれば、単に言葉の意味を理解するだけでなく、人間の認知を再確認することができる。今後は、量的スケールと質的スケールを精緻化させるとともに、語基と文脈からの影響をさらに検討し、「無」ではじまる漢語の理解を深めていきたい。

参考文献

相原林司（1986）「不ー　無ー　非ー　未ー」『日本語学』5（3）、明治書院、pp.67-72

有光奈美（2011）『日・英語の対比表現と否定のメカニズムー認知言語学と語用論の接点ー』開拓社

久保圭（2016）「日本語接辞にみられる否定の意味的多様性とその体系的分類」、京都大学大学院人間・環境研究科士論文

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2002）『日本国語大辞典〔第2版〕』小学館

野村雅昭（1973）「否定の接頭語「無・不・未・非」の用法」『ことばの研究』（国立国語研究所論集 4）、pp.31-50

林史典、岡昭夫、教育社国語編集部（1992）『15 万例文・成句 現代国語用例辞典』、教育社

山田忠雄、倉持保男、上野善道、山田明雄、井島正博、笹原宏之編（2020）『新明解国語辞典〔第八版〕』、三省堂

Croft, William and D. Alan Cruse (2004) *Cognitive Linguitics*, Cambridge University Press

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.2, Stanford University Press

Raykowski, Wes (2022) *Sensory Schema: From Sensory Contrasts to Antonyms* in *Cognitive Sematics* (*https://www.researchgate.net/publication/357975777_Sensory_Schema_From_Sensory_Contrasts_to_Antonyms_ARTICLE* 2022 年 8 月 26 日最終確認)

URL：国立国語研究所『日本語書き言葉均衡コーパス』（『中納言』*https://chunagon.ninjal.ac.jp/*）
用例.JP　（*https://Yourei.jp/*）
コトバンク（*https://kotobank.jp/*）

---

1 「無人」は「無人島、無人機、無人の待合室」などでは「ムジン」と読まれると、「人がいない」の意を表すが、ここに挙げた「無人」は「ブニン」と読まれ、「人のいない」の他、「人数が少ない、人手が足りない」の意を指す（新明解：1379）。

2 野村（1973）は「接頭語」を用いているが、本稿では「接頭辞」を用いる。

3 「無価（ムカ）」は「代価がない、ただである。」という用法が現代日本語で確認される。例：「循環型社会形成推進基本法においては、有価・無価を問わず「廃棄物等」とする（YOUREI）」。

4 「無茶」の語源説はいくつかあるが、「茶がない」から生じた可能性もある。来客に茶を出さないのは常識外れとされたところから発生したと日置昌一が指摘している（『日本国語大辞典』第二版,第 12 巻,pp.996）。